

戸隠講

宝物館開館記念企画展
古代と明日をつなぐ

信州戸隠山

戸隠神社
青龍殿



講の底力
輪はがきに記録された
むすびの復興力



昭和17年焼失前の中社社殿。現社殿もほぼ旧社殿のままに再建されているのがわかる。



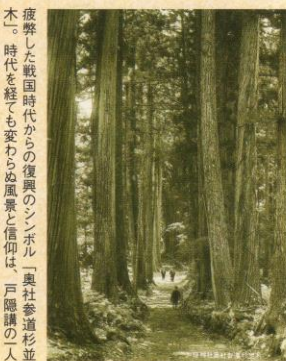
旧中社社殿の河鍋暁斎作、龍の天井絵。焼失するも平成15年に復元され現在によみがえった。



明治8年再建された奥社だが昭和37年、53年雪崩で全壊。同54年現在の堅固な社殿再建へ。



戸隠神社太々神楽の献奏は御神徳の宣揚におおきく寄与し、信徒の結束力を高めた。



疲弊した戦国時代からの復興のシンボル「奥社参道杉並木」。時代を経ても変わらぬ風景と信仰は、戸隠講の一人ひとりの底力に支えられ現代まで続く。

戸隠講の成立と発展

『顕光寺流記』は、戸隠寺本院の建立が嘉祥三(八五〇)年、宝光院分祀が康平元(一〇五八)年、中院分祀が寛治元(一〇八七)年と記す。これらは三院に奉仕する衆徒の寄進のための懸命な活動や信者の支援がなくては実現しないものだった。また、中世の「大般若経」六百巻の写経事業や「戸隠版法華経」版木の勧進も同様であり、そうした動きのなかから「講の起り」の一端が垣間見える。その後、天台宗の僧侶、修験者の先達としての衆徒たちが、様々な靈験譚をもって各地に戸隠権現の信者と講を広めていく。

徳川將軍家、大名・家中の信仰と講の広がり

江戸時代初期から奥院では毎年正月、国家安泰、公方様初め御家中安全のご祈禱をし、御籤でその年の吉凶を伺い、江戸城中へ届けており、戸隠衆徒は大名やその家中、そして各地に講を増やしていった。『戸隠靈験談』を始め、九頭竜権現のご利益が各地に伝わり、水神信仰の広がりは、川除・雨乞いの祈禱の増加という形で顕著に表れてくる。また、江戸時代中期から道標建立が多くなり、このころから案内道標を必要とする代参人の参詣が増加してきたことを知る事が出来る。

天保十二(一八四一)年の「三院衆徒分限帳」の檀家数集計は、信者総数八万二千五百十人。明治七(一八七四)年の「倭舞日記録大全」は、信者総数四万五千三百二十九人並びに長野県下六百二十三町村、他県二千九百六十二町村に講が分布していることを記す。大正七(一九一八)年「勸農施設報告書」は戸隠講員を二十八万五千八百人と報告している。

変動を経て、さらに明日につながる戸隠講

明治維新後、仏教を切り離し神道に二本化された戸隠神社は、同六(一八七三)年、久山・栗田・太田・京極の四家のみが神官資格を獲得、他の衆徒は民籍編入、帰農を命じられた。戸隠神社はみずから講の再興、衆徒の復権にむけて運動を展開。明治二十八(一八九五)年、旧衆徒も講社聚長として永世神社奉仕する特権を契約。また、この間、山崩れや火災、あるいは老朽化で倒壊した社殿の造営が相次いで行われたが、それらは資金集めに奔走した衆徒と各地の檀家(講)からの浄財を仰いで行われている。

千余年にわたって法の灯火を掲げ、信仰をつないできた戸隠神社。そこには衆徒(講社聚長)の活動と講の存在があり、幾多の苦難を乗り越えて講は広がっていった。地域共同体の崩壊が懸念され、高齢化の進む現在、戸隠信仰存続にむけての課題は多い。

聖域と霊峰

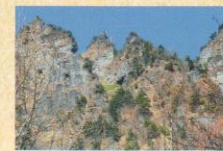
心に霊峰を据えて
人間の歩みと
信仰がはじまった



戸隠山の背後にそびえる美しい奥山、雲峰「高妻山」。高妻明神は本地仏を阿彌陀如来とする。



チベット仏教の聖域としても知られ、今なお人々の心の支えとなっている神山。左上「梅里雪山」の神女峰メツモ(雲南省)、左下「亜丁三神山」シアースドウジ(四川省)。撮影：高城泰輔



上下：2010年、新たに15世紀の仏教やボン教の宗教文書や壁画が大量に発見され世界的に話題となったネパールヒマラヤ山麓の「ムスタン洞窟」と山容。約2500年前と推定される人骨も出土した。撮影：佐藤剛祐

上：奥社から見える戸隠山の修行窟跡。下：戸隠山の山容。平安時代には「戸隠十三谷三三坊」と称された修験道場であった。

護りのかたち

神々を敬い想う
清々しいところが
暮らしを護った

御種兆



古来よりの秘儀によつて、穀物や薬草・桑・果実などの作物を予し、信者や檀家に配布した。これに基き各自は準備や計画を立てた。

御神籤



古くは観音百籤が用いられた。江戸時代、庶民の神籤普及も天海僧正が靈夢を元に取寄せた戸隠の観音百籤に継承されている。

御札



講社の聚長は毎年「御札」(神札)を持って檀家(種方・旦那)を巡回し各家に神棚や家の柱などに祀り戸隠の神々の加護を受け取った。



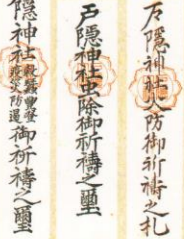
御神籤箱



御神籤箱



御守札綴



戸隠神社から出されたお札

講こう

はじめりは
求めることごと
地域の連帯から

神と人をつなぐ

「戸隠講」 とがくしこう

聖域



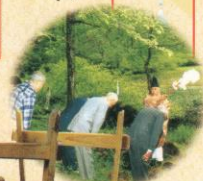
人間の道ゆきを聖域の大神に尋ねる。



参拝に訪れた戸隠講の人々

御神水ごしんすい

古来より種池の水を御神水として水桶に汲み入れ、祈禱の後持ち帰って田畑や池に注ぐと、旱魃の害を防止し雨乞いに効果あると信仰されている。



御神水の水桶

戸隠本社・九頭龍権現・三社様・三面大黒・五穀豊稔祈願日待礼・巳待・水札・川除け・火伏せの護り・村内安全風祭幣帛・虫除け・鳥追い・猿除け・馬札など

技術・知識

【九頭龍権現秘法】抜止めの杭・瀬換えの法・道切りの法
【戸隠権現薬方秘書】百草など各種の薬による病氣治療

知識に基づく技術力と折禱刀の両方で治水や災害にアウトして相談のつた。地滑り防止を訴願する霊験の杭は今日も広い地域で行われている。

九頭龍権現の秘法・抜止めの杭



九頭龍権現の秘法書



九頭龍大神の護符(左)とお札(右)

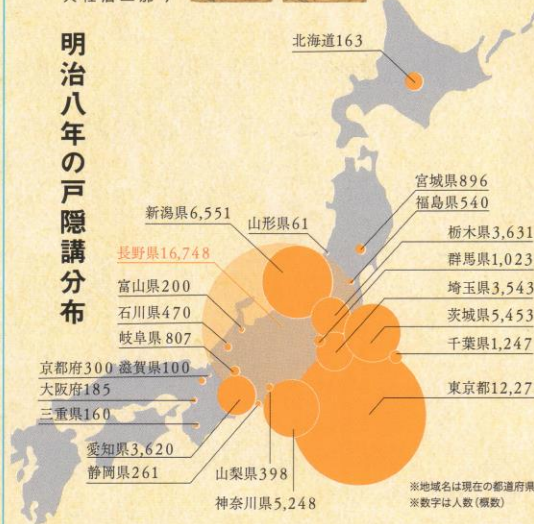
信仰の伝播

毎年の「戸隠さん」の訪れを楽しみに待って

天保十二年(一八四一)
戸隠山頭光寺檀家数
奥院 一万六千九百三十
宝光院 四万二千百二十
中院 一万三千百二十
(戸隠山全体合計八万二千余)

西条山止年 戸隠山
新橋且那 初進講
長山月 石川 池田 池田

明治元年 内容は同じであるが明治元年九月に戸隠山頭光寺が戸隠神社となつたことに対応するため「折禱所人名簿」と名称が変動している。



明治八年の戸隠講分布

抄録 「戸隠霊験談」 いろいろ

(原文「神道大系」神社編(二十四))



戸隠山開山学門行者像
(戸隠神社蔵)



種ヶ池の御水

さる申とし秋の二、越後國頸城郡藤崎百川の兩村より奥院谷安住院え請雨の祈禱をたのみ来りけるに、深く祈念して種ヶ池の御水を遣しけるに、此水は種水とて道中にも下におく事ならず、二ヶ日間地主の方に置いてのり、七日をふれ、常山持来り種ヶ池え戻す事なり。百川村には三日半日祈り、村環の河ぎしまで御水を持来し此処にて藤崎のものへ相渡しけるに、忽ち雲より夥敷雨ふりてければ、みな「概びあへり、されども此面村の外はいさかの小雨なりけるぞよしなり。」



井戸掘りて水勢とばしるようになきい

過しころ當國山中四ヶ谷村にて常用の井戸を掘けるに水がされは本意なくおもひ居けるに、折ふし奥院の地の安ければ、出水の祈念し終て深くたのまけるゆへ、いながたたくて、九頭竜権現えのりけるに、誦念数も終らざるに水勢とばしるやうにわきまければ、みなみな奇異のおもひをなす。



火災の難を逃れる

弘化五申としの事なりしが、越後の國しひやの阿達六兵衛い、すもの、常山権現をうねづね深く信仰しけるに、近邊より火出きて風もはげしければ家かつ数多焼失しけり。しかるに六兵衛はすも権現の菩薩をのり居たりしが、忽ち後の家に、風やみ火しつまりてあやうき難をのがければ彌信仰なしける。



海難中の加護

越後國岩船郡の石飛彦左衛門といふ船持、常々戸隠山権現を信仰しけるに、ある時北海にてわかた難風起り、きつれし船はみなみなくづがへりければ、船人ども一心に戸隠権現をのりしに船はたははしりにはしり、しばくありて風静ける故にみるに屏風の如き岩間に、海上はいまだ風やまざり。ひくに大権現の冥護力なりとてお礼参詣に登山して猪坊安住院を詣りける。



虫ばの痛みやむ

嘉永二年正月十日の夜、常山門前の和兵衛い、小もの虫ばにて面もはれ上り痛はなはだき故安住院を頼み祈念し貰ひけるに、その夜、覺すずみれぬ異人來たりて何ともしれぬ握ほとのものをあたへこられれば、足をもくふにそのあじわひ此災の物とも覺えず、忽ちたみ止めれば不思議の事におもひ、よも其常慮のはれはなほらざりけり。



困難であつた沼の水が引き新田開発に成功

越後國蒲原郡に紫雲寺湯ヶ二里に壹里の大沼ありしを、享保年中信州善光寺在米子村竹前権兵衛い、小もの越後へたり、此沼より大海まで里程貳里の間水道を掘り、沼の水をほらひ新田開発せしむる請にかゝりける。多分の費用かゝり、金主みなくづれば、心やすかざる。人力の及ぶ處ならざれば戸隠大権現は瀬川除に靈驗、こにあらにたまはせは、それより戸隠山にのぼり實光院合法院主にいたりくわし物語なし。此度衆人の難儀をすくひ玉へど、なくくたのみければ、われも丹精を盡しみごとく、力の及ぶかぎり供物をとて、七日の間秘密供を修しけるに、満願の日にたり風雨、こにはげしかりければ、こは権現の納受し玉ふならんとかたりけるゆへ、権兵衛ありがたくおもひ翌日出立なし越後へかへりけるに、沼の水はこごとく引て平地のこごとくなりければ、大によろこびそのまゝ立ち歸り、戸隠山御禮参詣なし、それより新田二萬石餘開発せしかば、官所より御届けになりて権兵衛は二丁四方の除地を給り、有功を賞し玉ひ、信州米子在生のものなればとて、村の名を米子と玉り、珠にいたりて猪家富榮と相續なしけり。



子の足腰が立つ

上野國群馬郡其輪村奥五郎といふものひとり男子をもうけるに、いかなる宿報にや年を経れば膝たたざれば父母のなげき大かたならず、戸隠山の僧實藏院惠林折しも與五郎が家に止宿しけるに、何卒権現さまへ御折り給はれ、と申ける故實藏院もあはれにおもひ、山に歸りなば、神前にていねんごころに祈念し御札守など送りやりけるに、明るとし、相尋ねればかの童は人なみに腰立ければ、父母、童子もうれしよろこびて出迎ひけりとなん。



戸隠神社・青龍殿 宝物館開館記念企画展 資料「古代から明日につながる戸隠講」 発行：平成 23 年 4 月 23 日

信州・戸隠山 戸隠神社 〒381-4101 長野県長野市戸隠3506 Tel.026(254)2001 Fax.026(254)3180 <http://www.togakushi-jinja.jp/>